



Title	アカデミック・ライティングにおける「(の)ではないか」の使われ方に関する一考察
Author(s)	小森, 万里
Citation	日本語・日本文化. 2014, 41, p. 37-60
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/50758
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

〈研究論文〉

アカデミック・ライティングにおける 「(の) ではないか」の使われ方に関する一考察

小森 万里

1. はじめに

本稿の目的は、アカデミック・ライティングのための日本語文法の提示の仕方を探るために、「(の) ではないか」を例にして、日本語母語話者による学術論文の中でこの形式の使われ方を明らかにすることである。

筆者は日本の大学に在籍する上級日本語学習者（以下、学習者）から、「レポートを書いていると、文法力が弱いと感じる」「いつもこの文法を間違えてしまうが、どう直せばいいのかわからない」「この文法は習ったことはあるが、レポートのような長い文章の中でどう使えばいいのかわからない」等、文法学習についての相談を受けることが少なからずあるが、このような事実から、学習者がアカデミック・ライティングのための日本語文法を学ぶ必要性を感じていることがわかる。

他方、教員側もアカデミック・ライティングにおける学習者の日本語文法力の向上を求めている。植田・今井（2007）によると、大学の専門科目の教員は、意味の通る日本語の文を書く能力が低いことが留学生の問題だと感じており、書く能力が弱いと感じた留学生について、平均的な日本人学生より弱い点は「文法力」と答えた教員が60%超、「文のつながり」と答えた教員が50%超であったということである。また、長谷川・堤（2012）でも、日本語非母語話者が書いた意見文を日本語・日本語教育専門の大学教員とその他の専門分野の大学教員に評価してもらった際の評価の着目点について、評価の低かった作文については「文法」が問題であると指摘されることが多いと述べられている。以上のことから、特に作文能力が低いと評価される学習者のアカデミック・ライティングにおいて、

まずは文レベル、談話レベルでの日本語の正確さが求められると考えられる。

本稿では、この「文法力」について、従来「上級文法」として日本語教材で扱われてきた文法形式（主に、日本語能力試験 N1 レベルの文法形式）の知識を増やすことを指すのではなく、日本語の文や文章を作る上での基本的な構造に関わる知識をレポートや論文を書くときに適切に使えるようになることを指す。

このような文法力を伸ばすためには、白川 (2002)、野田 (2005)、庵 (2011) 等で主張されているように、学習者が場面に合わせて適切に使用し、目的を達成できるような教育文法の提示が必要であると考え。そこで、学習者が日本語でレポートや論文が書けるようになるために、どのような文法記述が必要であるのかを、アカデミック・ライティングに必要な、意見を表す文末表現の一つである「(の)ではないか」を例に考えたい。

本稿では、2 節で「(の)ではないか」が先行研究の中でどのように扱われてきたかを概観し、「(の)ではないか」の中心的意味と機能について議論する。3 節では従来の作文教材での「(の)ではないか」の記述のされ方と問題点を示し、4 節で学習者のレポートの中にみられる「(の)ではないか」の使用上の課題を挙げる。そして、5 節ではこの形式が日本語母語話者による実際の学術論文でどのように使用されているかを調べ、学習者による「(の)ではないか」の適切な使用に結びつけるための文法記述に必要な項目を明らかにする。

2. 先行研究

仁田 (1987)、安達 (1992、1999) によれば、「(の)ではないか」は本来は情報要求文であるが、「傾き」を持つ疑問文であることから情報提供文としての機能に移行している。この情報提供機能をもつ「(の)ではないか」の使われ方については、佐藤 (2010) がコーパス調査を行っている。佐藤 (2010) によると、文学作品における「(の)ではないか」使用例のうち 9 割近くがこの用法であり、形態論的表示（「だろう (か)」の接続）や統語論的表示（「思う／考える／疑う」等の述語の補部に埋め込まれていること、地の文に使用されていること）があるものが多いということである。筆者が日本語母語話者によって書かれた学術論文における「(の)ではないか」の用例を調べたところ、「(の)ではないだろうか」

「(の) ではないかと {考える/考えた/考えられる}」「(の) ではないかという疑問」等の形式で用いられているものが多く¹⁾、アカデミック・ライティングにおいても佐藤 (2010) の調査と同様の使われ方であることがわかった。次の (1) は「だろう (か)」との接続の例であり、(2) は思考動詞の補部への埋め込みの例である。(下線は筆者記入)

- (1) 以上のような各社の経営陣の見解からは、彼らがファンド A との間に保とうとしている距離感を垣間見ることができる。たしかに、ファンド A による株式大量保有をきっかけとして、経営計画や各種意思決定にまつわる財務的な数字の根拠をこれまで以上に意識する経営陣が多くなってきてはいる。とはいえ、そうした経営陣に対して〈アクティビストファンドは長期的な「企業価値の向上」のためのパートナーたりえるか〉と問えば、その回答はおそらく否定的なものになるのではないだろうか。

(井上・池田 2010: 12)

- (2) 中本正智 (1976) は、琉球方言全域を網羅した膨大な資料から機能的に母音変化にともなう子音の変化について体系化したものである。その中で宮古、八重山方言のハ行子音の成立について、母音の狭母音化の影響で近接したウ段とオ段の区別をするためにハ行子音は、f と p に分化したとしている。本研究でもこの理論を踏まえ、宮古、八重山方言でウ段とオ段の区別をするための子音変化が起こったとみる。しかし、ウ段にみられる唇音性を強度にきわだたせた唇歯摩擦音 f については ϕ からの変化と捉え、p 音の素性については ϕ から p の変化による新しいものではないかと考える。つまり、狭母音化によって子音の緊張が高まり、摩擦音から破擦音へと変化したという見方である。

(中本 2011: 3)

以上のように、形態論的表示と統語論的表示をもつことから、アカデミック・ライティングで使用される「(の) ではないか」は情報提供文として機能しているといえる。では、どのような情報を提供しているのだろうか。

「(の) ではないか」の意味・用法の研究には、田野村 (1988)、三宅 (1994)、安達 (1999)、藤城 (2007) などがあり、この形式の基本的な意味はそれぞれ推定、推測、判断の根拠が欠如している場合の不確かな意見、暫定的な判断等、確信度

の低さを表すことであるとされている。

一方、宮崎 (2001) では、「(の) ではないか」は話し手自身の疑いを表すことに本質があり、話し手が一つの可能性を有力な仮説として選択したことを伝えているとされている。宮崎 (2001) は、(3) のように、可能性を表す「もしかしたら」等の副詞と共に起できる点で推測の「だろう」とは異なるふるまいを見せることを根拠に「(の) ではないか」が「可能性」を表すとし、また、(4) のように「あるいは」によって相矛盾する命題を同等に提示できないという点から、1つの可能性を選択していることを伝えているとしている。(?? は不自然な文であることを、*は非文であることを表す)

(3) もしかしたら、この刑事は自分のことを疑っているの {だろうか / ?? だろう}。 (宮崎 2001: 24)

(4) *彼は外出しているのではないか。あるいは寝ているのではないか。

(同: 18)

本稿では宮崎 (2001, 2005) に従い、「(の) ではないか」の基本的な意味を「話し手が一つの有力な可能性を選択したことを表す」とする。アカデミック・ライティングの中で、書き手は様々な資料やデータをもとに判断や結論を導き出しているものであり、そのように慎重に導き出した結論にわざわざ確信度の低さを表す形式を付加するとは考えにくいためである。では、このような「(の) ではないか」がアカデミック・ライティングで使用される際、どのような機能を持つのであろうか。

蓮沼 (2004, 2006) は、発話・思考動詞の引用形式を要素に含む評価的複合形式に「(の) ではないか」が付く場合、手持ちのデータにさまざまな観点から考察を加えた結果たどり着いた結論や主張に客観的妥当性があるという話し手の認識的態度を表す固定表現であり、こうした判断を提起しその共有や賛同を呼びかける話し手 (書き手) の伝達態度を表す用法へ機能を移行させていると述べている。そして、このようなレトリカルな機能への移行は、思考の対象化を行う「ど思う」を外すとより明らかになるとしている。その根拠としては、(5a) のように「だろう」を用いた場合は、話し手限りの考えとして主張を抑制し冷静な態度で自らの判断や結論を述べるというニュアンスがあるのに対し、「(の) ではないか」

いだろうか」を使用した場合は、それを積極的に読者に提起し賛同を呼びかけるニュアンスが感じ取れることが指摘されている。

- (5) 鈴木：そうですね。ですから違った人が来たという証拠があれば、例えば骨から、これは異人種ということがわかれば、これは問題でしょうが、それが見あたらないとすれば、一応、日本の本土の中だけで起こった現象と考えるべきではないかと思うんです。

(小松左京・鈴木尚「日本人のルーツをたどってみると」蓮沼 2004: 20)

- (5a) 一応、日本の本土の中だけで起こった現象と考えるべき 「ではないだろうか/だろう」。(同: 20)

筆者は「(の)ではないか」のレトリカルな機能は、発話・思考動詞の引用形式を要素に含む評価的複合形式以外のものに付加した場合にも表れると考える。それは、(1a)のように発話・思考動詞を含む評価的複合形式ではない語に「(の)ではないか」を付加した場合にも、「だろう」を付加した場合とは異なり、読み手に賛同を呼びかけるニュアンスが感じ取れるからである。

- (1a) とはいえ、そうした経営陣に対して〈アクティビストファンドは長期的な「企業価値の向上」のためのパートナーたりえるか〉と問えば、その回答はおそらく否定的なものになる 「のではないだろうか/だろう」。

また、「(の)ではないか」は出現形式によって機能が異なり、「(の)ではないだろうか」がレトリカルな機能を持つのに対し、「(の)ではないかとV」は思考を対象化し客観的に述べる機能を持つと考えられる。それは、文脈によって「(の)ではないだろうか」という形式が指向される場合と、「(の)ではないかとV」という形式が指向される場合があるからである。

次の(1b)は「否定的なものになる」という前接表現に「のではないだろうか」を付加すると自然であるが、「のではないかと考えられる」を付加すると不自然に感じられる。後者が不自然なのは、(1b)が仮の話を述べるという文脈であり、データから導き出した思考内容を述べているわけではないためである。もし(1c)のようにデータから導き出した思考内容を述べる文であれば、「(の)ではないかと考えられる」を選択することができる。

- (1b) 仮に、経営陣に対して〈アクティビストファンドは長期的な「企業価値の

向上」のためのパートナーたりえるか」と問うたとしよう。その回答はおそらく否定的なものになる {のではないだろうか/?? のではないかと考えられる}。

(1c) 以上のような調査結果から、経営陣はアクティビストファンドは長期的な「企業価値の向上」のためのパートナーとはなりえないとみなしているのではないかと考えられる。

以上のことから、「(の)ではないか」は出現形式によって書き手の表現態度が示されるとわかる。前述したとおり、「(の)ではないか」の中心的意味は「話し手が一つの有力な可能性を選択したことを表すこと」であり、単一形式ではこの中心的意味を表す表現として用いられるが、「(の)ではないかとV」という形式で出現する場合は、思考内容の対象化を行って客観的で妥当な判断であるという書き手の表現態度を示すことができ、「(の)ではないだろうか」という形式で出現する場合は、読み手に共有、賛同を求める書き手の表現態度を表すことができる。

このような日本語学の分野における先行研究での知見は、作文教材にどのように表れているだろうか。3節では従来の日本語作文教材における「(の)ではないか」の文法記述について考察する。

3. 従来の日本語作文教材における「(の)ではないか」の文法記述

従来の作文教材では、主に意味・機能を中心とした「(の)ではないか」の文法記述がなされている(表1)。「幾分疑問の気持ちを示しつつ」「確実さの程度」等の記述は、田野村(1988)、三宅(1994)、安達(1999)等の先行研究で確実性の低さを表すとされていることが反映しているようである。また、「自分の意見を相手に訴える」「大切な文につくことが多い」等の記述は、蓮沼(2004、2006)が指摘した「レトリカルな機能」に通じると捉えることができる。

しかし、このような記述のみでは、「疑問の気持ちを示しつつ行う判断」とはどのような判断なのか、「確実さの程度」とはどの程度の確実さなのか、「相手に訴える場合」や「言いたいことを慎重に示したいとき」とはどのような時なのか等、学習者が「(の)ではないか」を適切に選択し使用するための判断をすることが難しいと思われる。

表1 従来の日本語作文教材における「(の)ではないか」の記述

教材名	説明	例文
『実践にはんごの作文』	幾分疑問の気持ちを示しつつ行い判断 (p. 48)	
『大学生と留学生のための論文ワークブック』	(文法説明はないが、考察・提言・考察のまとめの後に付き、確実さの程度を表す言葉として紹介されている (p. 97, 102))	・Lee (1989) のように情報の量の面からだけで説明しようとするには無理があると考えられる。この問題には情報の質が関係している [*] の <u>ではないか</u> 。次の例はそれを示唆していると認められる。
『日本語の作文技術』	自分の意見を相手に訴える場合。作文の最後に使うと効果的である (p. 73)	・自分の健康管理をしっかり行い、時間を見つけて日帰りでもいいから旅に出て新しい出会いの機会をより多く作れば、充実した留学生活になる <u>のではないだろうか</u> 。
『留学生のためのここが大切文章表現のルール』	書き手が言いたいことを慎重に示したいときによく使われる。ほかの人の意見に反論する場合や、結論を言う場合など、大切な文につくことが多い (p. 40)	

※下線は筆者記入

また、使い方を示すための例文が載っている教材もあるが、文章全体の中のもののような構造の中に「(の)ではないか」を使用すればよいのかということ示されておらず、どこで使用するのが効果的であるのかはわかりにくい。

伊集院・高橋 (2009) は作文コーパスを調査し、日本・中国・韓国語母語話者の意見文において用いられた文末のモダリティの特徴を分析しているが、日本語母語話者の作文では「(の)ではないか」の出現割合が高いのに対し、中国・韓国語母語話者の出現割合はそれほど高くないことが示されている。この調査の対象は、上記の教材を使用したことのある学習者の作文とは限らないため断定はできないが、作文教材において、意味・機能のみを記述した文法説明だけでは、そ

の効果的な使用に結びつけることが難しいといえそうである。では、意見を述べる文末表現の使用について、学習者には具体的にどのような課題があるのだろうか。4節では「(の)ではないか」に絞ってその課題を考察する。

4. 「(の)ではないか」の使用にみられる学習者の課題

「(の)ではないか」の使用にみられる学習者の課題には、文レベルの課題と談話レベルの課題がある。

文レベルの課題については、「(の)ではない(だろう)か」と「(の)だろうか」の混同((6))、「(の)ではないか」との接続形の誤選択((7))があるが、これらは下線部の形に注意を促すことにより留学生自身での修正が可能である。(下線は筆者記入、[]は筆者が正用を記入)²⁾

(6) 近年日本で救急車業務の出動件数が増えていることが社会的な問題になっている。それは救急車の出動が無料で行われており、救急車が必要ないにも関わらず気軽に救急車を呼んでしまうことが一つの原因なのだろうか [のではないだろうか]。

(7) その上、企業側がもつフリーターに対する偏見が少なくなれば、フリーター問題が解消するではないか [のではないか] と考える。

しかし、次に挙げる談話レベルの課題は、非母語話者である学習者自身で気づき修正することが難しく、文法知識の提示や授業での指導に工夫が必要となる。談話レベルの課題とは、その一文だけを見れば文法的に誤りであると言えないが、文章の前後の流れから修正が必要となるものをさす。

一つ目は、「(の)ではないか」の非用である。文末に「(の)ではないか」がないために、その文のレポートの中での位置づけがわかりにくくなっているものである。(8)は学習者が書いたレポートの序論の一部であるが、下線部の文末に「(の)ではないか」がないために、その文が問題提起文であることが伝わらず、単なる事実の羅列であるように読み手に理解されてしまう可能性がある。

(8) 現在の日本の救急医療体制では、本人が自力で病院まで行けないような急患が発生した場合、救急車が要請され、最優先で治療を受けられることになっている。総務省消防庁『平成17年版消防白書』2005年12月によると、

04年は、救急出動は6.3秒に1回、救急自動車による搬送人員は474万3469人で、国民の27人に1人が救急搬送されたことになる。現在救急車は無料であるからこそ、不適正な使用者がとても多い [のではないだろうか]。(中略) このレポートでは、救急車を有料化するメリットとデメリットを挙げ、救急車を有料化すべきかどうかについて述べる。

梶本(1997)は、中・上級学習者の作文における問題点の一つとして、「型に沿っていない、または型の一部が欠落している」ことを挙げている。レポートや論文の導入部分の型については、二通他(2008)で、「問題の背景と注目すべき点」「問題提起」「研究の目的や必要性」の順に述べるのが論証型論文の構成例として示されているが、(8)では「(の)ではないか」がないために、問題の背景を述べた後、問題提起がなされないままレポートの目的が述べられているように読み取れてしまい、わかりにくい導入になっているといえる。また、この文で共起している「からこそ」によって書き手が救急車が無料であることに対して肯定的だと捉えられるために、問題提起をしている箇所だということが読み取りにくくなっている。(8)では「からこそ」ではなく「ことが原因で」等、マイナスの理由であることを明示する表現と共起させることが書き手の主張を誤解なく伝えるために重要だといえる。

梶本(1997)が「わかりやすい文章とは、(中略)構造と表現が相互に支え合う関係で成り立っていないといけない」と述べているように、アカデミック・ライティングのための文法記述では、レポートや論文の型に合った構造を示した上で、構造の中のそれぞれの項目を明確に示すための文型や共起表現を示す必要があると考えられる。

二つ目の課題は、同じ表現の重複である。意見を表す文末表現(例えば、「と思う」)を何度も使うために、単に意見を並列させているだけであるような印象を与えてしまう例が多い。

佐藤・戸村(1996)、戸村(1996)が「(の)ではないか」は、文段³⁾末尾で使用され、締めくくりの役割を果たしているとし、また、伊集院(2011)が「(の)ではないだろうか」という複合形式での提示が多いと述べている等、先行研究において、「(の)ではないか」が使用される場所や構造、出現形式が明らかにされ

つつあり、このような使い方に関わる知識を学習者に提示することが必要であると思われる。(9)は学習者が書いたレポートの「おわりに」の一部であるが、最後の一文の文末を「(の)ではないだろうか」にすると重複による違和感がなくなり、レポートの自然な締めくくりとなる。このような運用を可能にするためには、「(の)ではないか」が出現する場所や出現形式の提示も、談話レベルの課題解決に必要な知識の一つであると考えられる。

(9) 私は、「ネットカフェ難民」の原因の一部には、若者らの甘い職業意識も少しあると思うが、定期的、安定的な仕事がない経済状況や、日本特有の高い家賃がもっと大きい原因だと思う。このような問題を解決するためには、働く意思を持っている若者らに、積極的な職業教育を行う一方、職業斡旋のシステムを通じて安定的な仕事が供給できるように政府や社会の努力が必要だと思う [必要なのではないだろうか]。

では、「(の)ではないか」はレポートでどのように使用するのが効果的なのだろうか。5節では、「(の)ではないか」の使用に必要な文法知識の具体的な記述に向けて、日本語母語話者によって書かれた学術論文における「(の)ではないか」の使用例を調査し、使用状況の傾向を分析する。

5. 調査対象

5.1. 調査分野

本稿で目指す「(の)ではないか」の記述は、論文やレポートを書く必要のある学習者が実際の使用に役立てることのできる文法知識の提示である。そこで、留学生の在籍数が多い分野の論文における「(の)ではないか」の使用状況を調査した。

独立行政法人日本学生支援機構の平成23年度の調査によると、専門分野別留学生数は、多い順に社会科学(構成比40.4%)、人文科学(同20.2%)、工学(同16.9%)である。また留学生受入数上位10校⁴⁾のうち、インターネット上で学部・研究科別留学生数が公開されていた大学の情報より、社会科学では経済・経営、人文科学では言語・文化・社会・国際関係を学ぶことができる学部・留学生の在籍数が多いことがわかった⁵⁾。工学は英語で論文を執筆している場合が多いと考え

られる。そこで、本稿では社会科学系（経済・経営）、人文科学系（言語・文化・社会・国際関係）論文を調査することにした。

5.2. 論文データ収集方法

おおむね 1000 人以上の会員数をもつ学会誌より、社会科学系、人文科学系の学術論文から用例を収集した。社会科学系は経済・経営に関する論文より 62 例（『国際経済』（2003 年 54 号～2011 年 62 号）より 20 例、『日本経営学会誌』（2010 年第 25 号～2011 年第 28 号）より 20 例、『経営行動科学』（2010 年第 23 巻第 1 号～2011 年第 24 巻第 2 号）より 22 例）、人文科学系は言語・文化・社会・国際関係に関する論文より 64 例（『日本語の研究』（2011 年第 7 巻 1 号～2012 年第 8 巻 1 号）より 21 例、『異文化間教育』（2010 年 28 号～31 号）より 22 例、『アジア研究』（2008 年第 54 巻 1 号～2009 年第 55 巻 2 号）より 21 例）と各分野からほぼ同数の例文を集め、合計 126 例を分類し、使用状況にどのような特徴があるかを調査した。

6. 結果と考察

本稿では、「(の) ではないか」を出現場所によって用例分類した。これは、学習者が実際にレポートや論文を書き進めていく際に、まず、どの場所において「(の) ではないか」を使用するのかという情報が優先し、その上で、どのような

表 2 各用法の用例数

	出現場所	社会科学系	人文科学系
書き手の意見を表す用法	導入部分	17 (27.4%)	19 (29.7%)
	本論部分	29 (46.8%)	32 (50.0%)
	終結部分	5 (8.1%)	3 (4.7%)
他者の意見を表す用法	本論部分	10 (16.1%)	9 (14.1%)
その他		1 (1.6%)	1 (1.6%)
合計		62 (100.0%)	64 (*100.1%)

※小数第 2 位を四捨五入しているため、合計は必ずしも 100.0% にならない

構造を作って文章を展開し、その構造の中でどう使用すれば効果的であるのかという順に参考にできるような記述にすることが4節で挙げた学習者の課題の解決に役立つと考えたためである。

表2からわかるように、出現場所ごとの用例数には分野による大きな差はなかった。以下、用法ごとに①出現場所（導入部分、本論部分、終結部分のいずれか）、②出現する構造、③共起しやすい表現、④出現形式の傾向をみていく。

6.1. 導入部分における書き手による問題提起・自説の提示

一つ目は、導入部分において、先行研究や現状には問題があるということを書き手が指摘したり、先行研究や現状をもとに書き手が自説を提示したりする文に「(の)ではないか」を付加する用法である。書き手による問題提起、自説の提示が、「(の)ではないか」の中心的意味である「話し手が一つの有力な可能性として選択したもの」であると考えられる。

構造としては、①先行研究や現状、背景の説明をした（____部）後、②書き手による問題提起、または自説の提示を「(の)ではないか」によって行う（____部）ものとなっている。

問題提起をする場合は「難しい」「弊害が強まる」「～しまう」「～にくい」等、マイナスの意味をもつ表現や、「考えるべき」「必要がある」「重要」等の評価を表す表現と共起し、書き手が自説を提示する場合は「～ {によって/ことで/ば} …ことができるのではないか」等の手段や条件を表す文型や、「～ため、…のではないか」「～ことは…につながるのではないか」等の因果関係を表す文型と共起することが多い。

出現形式は、問題提起をする場合は「(の)ではないだろうか」の形が最も多く、読み手との問題意識の共有、あるいは賛同を得ようとする書き手の表現態度が表されている。自説を提示する場合は「(の)ではないだろうか」に加えて「(の)ではないかと {考える/考えられる}」の形も多く、思考内容を対象化した提示の仕方となっている。

次の(10)は「(の)ではないか」によって問題提起をしている例であり、(11)は自説を提示する例である。

- (10) また、von Hippel & Katz (2002) は、メーカーは、ユーザーニーズを探索するという手間のかかる作業を積極的に放棄して、その代わりに、ユーザー自身を製品開発に参加させるべきだと主張している。

しかしながら、移転する費用が大きいという要因だけで、すべてのユーザーがイノベーション活動を行なえるとは限らない。ユーザーが製造業、非製造業にかかわらず関連技術や知識をほとんど持ち合わせていない場合、選択と集中によりメーカーへ徹底して依存している場合、規模や範囲の経済性などから活動が歓迎されない場合など、むしろ、ユーザーがイノベーション活動を行ないにくい状況のほうが多いのではなかろうか。

(北 2011: 4)

- (11) (前略) ここで、なぜ「フィリピン系」生徒を対象にするのか、その理由と意義を述べる。

第一に、フィリピンは世界有数の出稼ぎ大国であり、全人口の約1割の約800万人が世界中に出稼ぎや移住していることから、トランスナショナルな観点から分析する意義が大きい集団であることが指摘できる。既存の「ニューカマーと教育」研究は、学校文化や教師の特質、「ニューカマー」家庭がもつ「家族の物語」や「教育戦略」などを丹念に検討している点で示唆的であるが(太田、2000、志水・清水、2001)、日本を準拠枠として設定しているため、日本国外に在住する人々との関係性は十分に検討されておらず、彼ら、彼女らの意識と行為の意味が十分に考察されてこなかった。本研究では、「フィリピン系」に注目することで、トランスナショナルな観点から「ニューカマー」の子どもたちについて論じていく必要があることを、より強く示していくことができるのではないかと考える。(徳永 2008: 88)

6.2. 本論部分における考察のまとめ

二つ目は、本論部分において、考察のまとめに「(の)ではないか」を付加する用法である。書き手が調査したデータや資料をもとに分析、考察した結果、一つの有力な可能性を結論として選択したことを表す。

構造は、3つの構造タイプ（主張型、帰結型、理由型）に分けられた。最も数が多かった主張型は、①調査・分析結果を述べた後、②その結果を踏まえ、「(の)ではないか」によって (a) 反論を述べたり、(b) 書き手の意見を述べたり、(c) 別論点を提示したりする等書き手の主張を行う構造となっている。以下、(a)～(c)の順に構造と共起表現をみていく。

(a) の反論を述べる場合は、調査・分析結果（_____部）の後、「しかし」「だが」など逆接の接続詞が共起した上で、書き手による反論が述べられる（_____部）構造となっている。また、(1)のように「たしかに…である。とはいえ、…(の)ではないか」という譲歩の構造をとるものも少なくない。

(12) 『万葉集』のような非日常的資料に使用される万葉仮名は、平安時代の平仮名へは直接つながらず、むしろ日常・実用に供されるような資料において使用される万葉仮名が、字形を崩して平仮名の成立につながったと現在では考えられている。しかし、資料性は異なっても、表記者が読者から字母の字義を意識されたくないと考え、表記する語の語形を示すだけの純粋に表音的な役割を仮名に担わせたいと考えることは、『万葉集』の字義を意識させない字母選択と、平仮名の字形を崩す行為とに共通する動機であったのではないか。(澤崎 2012: 64)

(1) 以上のような各社の経営陣の見解からは、彼らがファンドAとの間に保とうとしている距離感を垣間見ることができる。たしかに、ファンドAによる株式大量保有をきっかけとして、経営計画や各種意思決定にまつわる財務的な数字の根拠をこれまで以上に意識する経営陣が多くなってきてはいる。とはいえ、そうした経営陣に対して〈アクティビストファンドは長期的な「企業価値の向上」のためのパートナーたりえるか〉と問えば、その回答はおそらく否定的なものになるのではないだろうか。(井上・池田 2010: 12)

(b) の書き手の考えを提示する場合は、調査・分析結果（_____部）の後、前述したことを総括する「このように」「こうした」、判断の妥当性を表す「やはり」、書き手の立場を表す「筆者としては」、言い換えを表す「すなわち」、書き手の推量を表す「おそらく」などが共起した上で、「(の)ではないか」によって書き手

の意見が述べられる（___部）構造となっている。

- (13) 新車ディーラー約1,700社の新車売上高はおよそ10～12兆円であり、中古車売上高は2～3兆円である。中古車輸出は新車販売と比較すると小さいが、現在の中古車の国内販売額（小売と卸売）の3分の1程度に達しているのである。こうしたビジネスチャンスを活かすことが問われているのではないだろうか。（塩地 2010: 34）

(c) の書き手による別論点の提示をする（異なる視点から考える必要があることを述べる）場合は、調査・分析結果（_____部）の後、「一方」「また」等の対比、並列を表す接続詞や、「むしろ」「というよりは」等の比較選択を表す表現が共起し、「(の) ではないか」を伴って書き手による別論点提示が行われる（___部）構造となっている。

- (14) 今回行った調査では、職務が明確であることがWLB意識の高まりにも影響を与えていることがわかった。しかしながら、自律性や仕事の要求度などと異なり、職務の明確性はHackman & OldhamやKarasekの職務特性モデルに含まれていないせいも、先行するWLB研究の要因として取り上げられている例は見当たらない。（中略）前述のとおり欧米ではそもそもPerson-Job Fitの考え方が深く浸透しているため、職務が明確であるかどうかを考慮する必要性が低い。一方、Person-Organization Fitの考え方が根強く残る日本企業においては、職務の明確性はむしろ、職務特性の重要な一要因としての役割を果たすのではないだろうか。（加藤 2011: 64）

主張型の次に数が多かった帰結型は、①調査・分析結果を述べた（_____部）後、②考察を行い（___部）、③得られた帰結を「(の) ではないか」によって示す（___部）構造となっており、「このように」「このことから」「したがって」など総括、結論を表す接続表現が共起している。

- (15) （前略）つぎに、研究環境と関連の高い因子が、理系では相関関係の高い順に、日本人学生との人間関係（ $r=-.482, p<.01$ ）、（中略）どれも1%水準で有意となり、負の相関が見られた。

理系と文系で優位差の出た項目に差異はないが、その数値には差が見

られた。理系では、研究環境と関連のあるものとして「日本人学生との人間関係」及び「教員との人間関係」という人的な環境が比較的高い数値を示している一方、文系では、どれも低い数値を表わしている。

これらの結果から、理系の院留学生は、研究室での日本人学生との人間関係を人的資源として重要視していること、研究に最も重要だと考えられているのは教員の存在であることが示唆された。一方、文系では(中略)このように、研究室態勢のもとに研究が進められる理系と、個人研究態勢になりがちな文系の研究環境の違いが困難度と関わっているのではないかと考えられる。(園田 2009: 72)

また、理由型は、①調査・分析結果を述べた(____部)後、②データ解釈を行う(____部)、③なぜそのような解釈となったのかについての理由付けを「(の)ではないか」によって行う(____部)構造となっており、「そのため…のではないか」「これは…ためではないか」など理由を表す文型と共起している。

- (16) ムラ・ラムヨ・ケムヨの文、及び、その他の連体形十ヨの文の主語を、人称別にまとめると次の如くである。(中略) ムヨ・ラムヨ・ケムヨの文は、言語主体自身の行為を述べるのに、あまり適していないと言える。そして、これは、ムヨ・ラムヨ・ケムヨの文の言語主体が、「当事者」というよりも「第三者」的なスタンスで事態に向き合うためではないか。
(栗田 2011: 25)

このような本論部分で使用される用法の出現形式で特徴的だったのは、「(の)ではないだろうか」、「(の)ではないかと {考える/考えられる}」の他、「(の)ではないか」という単一形式での使用も多かったことである。単一形式を使用することにより、読み手に共有、賛同を求めるといったレトリカルな機能よりむしろ「書き手が選択した一つの有力な可能性を示す」という本来の意味を強く表すことを目的として、本論での考察のまとめに使用されるのであろう。

6.3. 終結部分における締めくくり

三つ目は、終結部分における論文の締めくくりとしての書き手の意見に「(の)ではないか」を付加する用法である。この用法も 6.1. と同様、レトリカルな機能

が前面に出ている用法である。

構造としては、①論文のまとめをした(____部)後、②「(の)ではないだろうか」によって締めくくりをして(____部)論文を終わるか、さらに③今後の課題を述べて論文を終わる(____部)ものとなっている。

この用法は、「求められている」「ほうがよい」等書き手の評価を表す語や、「つながっていく」「可能となる」等今後の可能性を表す語と共起しているものが多い。使用形式は、「(の)ではないだろうか」という形式で、読み手との共有、賛同を得ようとする表現態度が表わされている。

- (17) 小論では、このような分析から、教師たちが日本語での教科学習内容の理解に必要な要因をどのように捉えているか、また外国人児童生徒への関わり方が違う教師間の意識の違いを明らかにし、さらにこの意識の違いの要因を考察した。(中略) こういったことは田淵(2007)が必要であると訴えている「マイノリティの子どもたちのおかれた厳しい状況を認識する教職カリキュラム」につながっていくのではないだろうか。(この後、「今後の課題」の節に続く) (川口 2008: 86)

6.4. 本論部分における他者の意見の提示

「(の)ではないか」は書き手の意見を述べる際に使用されるだけでなく、他者による問題点指摘や他者の意見の提示をする場合もあり、その多くが本論部分で用いられている。

構造としては、①論じているテーマについて先行研究や従来状況の中でどのような問題点や意見が論じられてきたか、あるいは、書き手による調査の中で他者からどのような意見が挙げられていたかを「(の)ではないか」で示し(____部)、②それらの問題点や他者の意見に対する書き手の意見を提示するというもの(____部)が多い。

出現形式は、「(の)ではないかと {論じ/思っ/解釈し/推察し} ている」等の発話・思考動詞の補部に埋め込む形式か、「(の)ではないか {という/との} +名詞」と連体修飾節で用いられる形式となっていた。後者の場合、共起する名詞には「議論、問題、視点、意見、期待」等の発言、思考、判断を表す名詞が使

用されている。他者の意見を対象化して述べるために、このような形式がとられるのだと考えられる。

(18) これら華僑の投資ネットワークに関する検討は、華僑や印僑の「民族性」に起因する本来的な特性に基づくのかそれとも国際移動によって形成された「跨地域性」に基づくのか、移民先の国家経済政策の特徴に基づくのか、さらには国際化した現在の金融市場の中では、このような特徴はむしろ後景に退いているのではないか、などの議論として、絶えず繰り返されてきた。そこでは、国民国家、国民経済の枠組みによって議論す

表3 日本語母語話者による「(の)ではないか」の使用状況

出現場所	構造	共起表現	出現形式の傾向	意味・機能
導入部分	背景→* <u>問題提起</u> →論文の目的	マイナスの意味・書き手の評価を表す表現	(の)ではないだろうか	レトリカルな機能
	背景→ <u>自説の提示</u> →論文の目的	手段・仮定・因果関係を表す文型	(の)ではないかとV	思考内容の対象化
本論部分	調査結果→ <u>主張</u>	逆接・譲歩、総括・妥当性・立場・言い換え・推量、対比・並列・比較選択の副詞・接続表現	(の)ではないか (の)ではないかとV (の)ではないだろうか	中心的な意味 思考内容の対象化 レトリカルな機能
	調査結果→ <u>考察</u> → <u>帰結</u>	総括・結論の接続表現		
	調査結果→ <u>データ</u> 解釈→ <u>理由</u>	理由を表す文型		
終結部分	まとめ→ <u>締めくくり</u> →(今後の課題)	書き手の評価・今後の可能性を表す表現	(の)ではないだろうか	レトリカルな機能
本論部分 (他者の意見)	<u>他者の意見</u> →書き手の意見	発話・思考動詞、発言・思考・判断の名詞	(の)ではないか という+名詞 (の)ではないかとV	思考内容の対象化

※_部で「(の)ではないか」を使用する

るといふ、現代の分析枠組の問題点が浮き彫りにされてきている。移動が常態化しつつある現代社会において、この現象をそのものとして捉える方法が求められている所以である。別言すれば、移民研究が同化理論を中心に定着化・在地化の方向で行われてきたという現在にも続く特徴をもつことに対して、むしろ移動は、往復移動する関係性、ネットワークの形成であると捉え、そのネットワークが形成するさまざまに交差し、重層する地域間関係を考える必要がある。(濱下 2009: 64)

以上の使用状況をまとめると、表3のようになる。出現場所、構造、共起表現、出現形式とそれに対応した意味・機能という非母語話者でも選択しやすい具体性のある項目を挙げた文法記述を提示することで、「非用」「同じ表現の重複」という談話レベルの問題を解決できる可能性があるのではないだろうか。

7. おわりに

本稿では、意見を述べる文末表現「(の)ではないか」について出現場所による分類を行い、構造、共起表現、出現形式に関する日本語母語話者の使用状況を調べた。従来の意味・機能だけに頼らない文法記述の方法を探したが、このような文法記述の仕方が、学習者がアカデミック・ライティングにおいてこの形式を適切に使用する一助となることを期待する。

とはいえ、今回の調査は十分な調査とはいええない。まず、用例数が126例と少ないため、用例数を増やし記述の精緻化を図る必要がある。また、実際にこのような文法記述の仕方がどの程度有効なのかを検証する必要がある。現在、このような文法記述を入れた教材を試用中であるため、その効果を図るためのデータを蓄積していきたい。さらに、他の意見を表す文末表現との使い分けについても調査していきたいと考える。

註

- 1) 筆者が収集した用例は、「だろう」との併用が34.7%、思考動詞埋め込み文が35.5%、「～という名詞」の形が12.9%であった。また、「(の)ではないか」という単一形式で示されたのは16.9%であったが、この単一形式での提示は全て地の

文の中にあった。したがって、全ての例文に形態論的、統語論的表示があったといえる。

- 2) 2007年に筆者が担当した作文の授業の受講生41名が提出したレポートを調査した。学習者による作文例の中の、意見を述べる表現以外の文法の誤りは、授業で教員の添削を受けているため、訂正されている。
- 3) 「文段」という概念については、市川(1978)が「文章の内部の文集合(もしくは一文)が、内容上まとまりとして、相対的に他と区分される部分のこと」と述べており、佐藤・戸村(1996)、戸村(1996)もこの概念を援用している。
- 4) 日本学生支援機構の平成23年度調査による留学生受入数上位10校は、早稲田大学、日本経済大学、東京大学、立命館アジア太平洋大学、九州大学、大阪大学、筑波大学、京都大学、名古屋大学、東北大学であった。
- 5) 留学生受入数第1位の早稲田大学において留学生の在籍数が多い学部は最も多い学部から順に国際教養学部890人、政治経済学部228人、日本語教育研究センター212人、商学部146人。第3位の東京大学は工学部66人、経済学部27人、理学部17人、文学部15人。大学院では工学系268人、総合文化154人。第6位の大阪大学は、工学部・工学研究科498人、経済学部・経済研究科185人、言語文化研究科168人。第10位の東北大学は工学部・工学研究科424人、文学部・文学研究科147人、経済学部・経済研究科147人であった。

参考資料

- 安達太郎(1992)『傾き』を持つ疑問文—情報要求文から情報提供文へ』『日本語教育』77号 pp.49-61
- 安達太郎(1999)『日本語研究叢書11 日本語疑問文における判断の諸相』くろしお出版
- 庵功雄(2011)「日本語記述文法と日本語教育文法」『日本語教育文法のための多様なアプローチ』ひつじ書房 pp.1-12
- 石黒圭・筒井千絵(2009)『留学生のためのここが大切文章表現のルール』スリーエーネットワーク
- 伊集院郁子・高橋圭子(2009)「日本語の意見文に用いられる文末のモダリティ—日本・中国・韓国語母語話者の比較—」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』36号 pp.13-27
- 伊集院郁子(2011)「文法表現指導の観点から『中級日本語』の文型を考える」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』37号 pp.47-61
- 市川孝(1978)『国語教育のための文章論概説』教育出版

- 倉八順子 (2000) 『日本語の作文技術 中・上級』古今書院
- 佐藤政光・加納千恵子・田辺和子・西村よしみ (1986) 『実践にほんごの作文』凡人社
- 佐藤政光・戸村佳代 (1996) 「中～上級日本語学習者に対する作文指導法の研究と教材開発」『明治大学人文科学研究紀要』第40冊 pp. 1-69
- 佐藤雄亮 (2010) 『『のではないか』における〔質問〕と〔疑い〕の差異—BCCWJの用例分析から—』『日本語文法』10巻2号 pp. 93-108
- 白川博之 (2002) 「記述的研究と日本語教育—『語学的研究』の必要性と可能性—」『日本語文法』2巻2号 pp. 62-80
- 梶本総子 (1997) 「意見文の構造—中・上級学習者の作文における問題点—」『大阪大学留学生センター研究論集 多文化社会と留学生交流』創刊号 pp. 79-91
- 田野村忠温 (1988) 「否定疑問文小考」『国語学』152集 pp. 123-109
- 植田和美・今井美登里 (2007) 「留学生に対する効果的なアカデミック・ライティングの指導法および教材開発のための基礎研究」『桜美林大学言語教育論叢』第3号 pp. 1-16
- 戸村佳代 (1996) 「論述文における文段末尾文の文機能と文法形式」『人文科学論集』第43.44輯合併号 pp. 15-21
- 仁田義雄 (1987) 「日本語疑問表現の諸相」『言語学の視界』大学書林 pp. 179-202
- 二通信子・大島弥生・因 京子・佐藤勢紀子・山本富美子 (2008) 「論じる行為への理解を進める論文・レポート作成支援表現集の開発」『専門日本語教育研究』第10号 pp. 53-58
- 野田尚史 (2005) 「コミュニケーションのための日本語教育文法の設計図」『コミュニケーションのための日本語教育文法』くろしお出版 pp. 1-20
- 蓮沼昭子 (2004) 「認知的モダリティとレトリック—『のではないか』再考—」『日本語教育連絡会議論文集』vol. 16 pp. 10-22
- 蓮沼昭子 (2006) 「譲歩の談話と認知的モダリティ—『のではないか』はなぜ譲歩文と共起しないのか」『言外と言内の交流分野 小泉保博士傘寿記念論文集』大学書林 pp. 455-469
- 長谷川哲子・堤良一 (2012) 「意見文の分かりやすさを決めるのは何か?—大学教員による作文評価を通じて—」『関西学院大学日本語教育センター紀要』創刊号 pp. 7-18
- 浜田麻里・平尾得子・由井紀久子 (1997) 『大学生と留学生のための論文ワークブック』くろしお出版
- 藤城浩子 (2007) 『『ノデハナイカ』類の意味・機能』『三重大学日本語学文学』18巻 pp. 15-29
- 三宅宏宏 (1994) 「否定疑問文による確認要求的表現について」『現代日本語研究』第1号

pp. 15-26

- 宮崎和人 (2001) 「認識的モダリティとしての〈疑い〉—「ダロウカ」と「ノデハナイカ」—」『国語学』第52巻第3号 pp. 15-30
- 宮崎和人 (2005) 『現代日本語の疑問表現—疑いと確認要求—』ひつじ書房
- 宮崎和人・安達太郎・野田春美・高梨信乃 (2002) 『モダリティ』くろしお出版
- 大阪大学「外国人留学生数」(平成25年5月1日現在) <http://www.osaka-u.ac.jp/ja/guide/about/data/international.html> (2013年9月13日参照)
- 東京大学「平成25年5月1日学部学生・研究生・聴講生数調」<http://www.u-tokyo.ac.jp/stu04/pdf/G20130501.pdf> (2013年9月17日参照)
- 東京大学「学生・研究生・聴講生数」(平成25年5月1日現在) http://www.u-tokyo.ac.jp/stu04/e08_02_j.html (2013年9月17日参照)
- 東北大学「外国人留学生数」(平成25年5月1日現在) <http://www.tohoku.ac.jp/japanese/profile/about/09/about0905/> (2013年9月17日参照)
- 独立行政法人日本学生支援機構「平成23年度外国人留学生在籍状況調査結果」(平成23年5月1日現在) http://www.jasso.go.jp/statistics/intl_student/data11.html (2013年9月17日参照)
- 早稲田大学「2013年度前期(春学期)早稲田大学外国人留学生在籍数」(平成23年5月1日現在) http://www.waseda.jp/cie/pdf/admission/date/201305_jp.pdf (2013年9月17日参照)

引用論文

- 井上真由美・池田広男 (2010) 「日本のコーポレート・ガバナンスとアクティビストファンドの関係」『日本経営学会誌』第25号 pp. 3-14
- 加藤恭子 (2011) 「米国M州における日本人駐在員の仕事と家庭の両立に関する意識調査」『日本経営学会誌』第28号 pp. 53-65
- 川口直巳 (2008) 「在日外国人児童の学業達成に関わる要因の理解—教師へのアンケートによる調査を通して—」『異文化間教育』27号 pp. 75-86
- 北真収 (2011) 「粘着情報の解釈とその構造」『日本経営学会誌』第27号 pp. 3-14
- 栗田岳 (2011) 「しづ心なく花のちるらむ—ム系助動詞と『設想』」『日本語の研究』第7巻1号 pp. 16-31
- 澤崎文 (2012) 「万葉仮名の字義を意識させない字母選択—『万葉集』における訓仮名を中心に—」『日本語の研究』第8巻1号 pp. 75-62
- 塩地洋 (2010) 「中古車輸出業の特徴と構造—非寡占的業界構造の今後の変化を展望して—」『日本経営学会誌』第26号 pp. 27-38

- 園田智子 (2009) 「大学院留学生の研究生生活における困難度とその関連要因—理系と文系の際に着目して—」『異文化間教育』29号 pp. 64-76
- 徳永智子 (2008) 「『フィリピン系ニューカマー』生徒の進路意識と将来展望—『重要な他者』と『来日経緯』に着目して—」『異文化間教育』28号 異文化間教育学会 pp. 87-99
- 中本謙 (2011) 「P音再考—琉球方言ハ行子音p音の素性」『日本語の研究』第7巻第4号 pp. 1-13
- 濱下武志 (2009) 「Chineseの国際移動と国際秩序 歴史、現在、未来」『アジア研究』Vol. 55 No. 2 pp. 56-69

<キーワード> 日本語教育、日本語文法教育、作文教育、談話レベル、文章構造

Pedagogical Observations on the Usage of “(no)dewanaika” in Japanese Academic Writing

Mari KOMORI

The purpose of this study is to present pedagogical grammar for teaching advanced level students from abroad how to write academic papers in Japanese which enable them to obtain a degree from a Japanese university. These students sometimes cannot use appropriate Japanese grammar, despite having learnt various Japanese grammatical forms, and often have difficulty in making their papers understandable. Thus we need to facilitate more concrete grammatical knowledge to enable students to successfully complete academic writing tasks.

In this paper, I focused on “(no)dewanaika,” and I researched how Japanese native speakers use this expression in their papers. I found that “(no)dewanaika” has 4 uses in academic writing, and each use has a distinct feature; the place of using this expression, the discourse structure in using this expression, and the words that co-occur with this expression.